

画家・俳人

下村 為山

【洋画家として出発】

明治から昭和にかけて活躍した下村為山は、画家・俳人など多彩な側面を持った人物です。

為山は、慶応元年（一八六五）に松山市出淵町（現・三番町）で生まれました。

はじめは、西洋画家をめざして上京し、小山正太郎の不同舎で、中村不折とともに洋画を学び、小山門下の双壁として讃えられました。明治二十二年には、明治美術会第一回展に出品し、森鷗外の批評を受け、翌二十三年の第三回内国勸業博覧会に、「慈悲者殺生」を出品し、褒章を受けるなど西洋画家として名声を博しました。

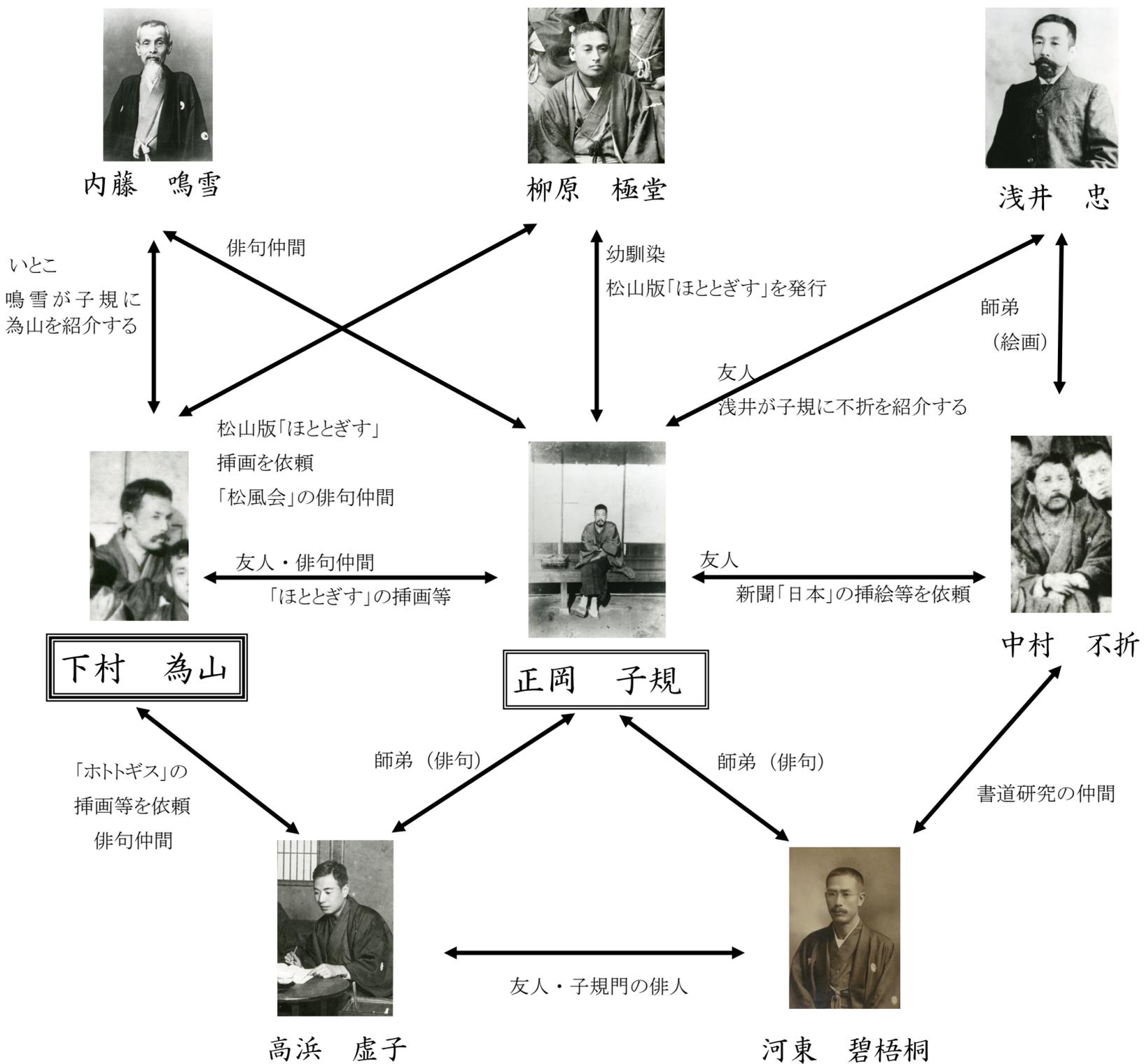


下村為山

(松山市立子規記念博物館所蔵)

為山を取り巻く人々

(人物写真は、すべて松山市立子規記念博物館所蔵)

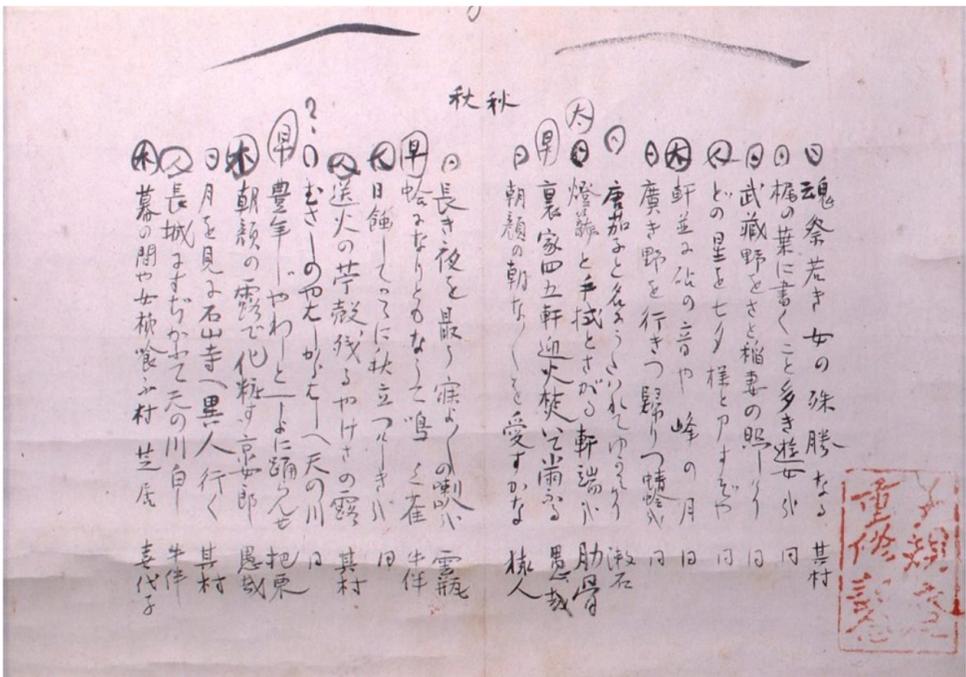


【子規との出会い】

明治二十三年従兄で常盤会寄宿舎監督の内藤鳴雪を訪問した際、正岡子規を知り、以後子規に俳句を学び親交を深めます。この頃、子規と邦画洋画の優劣を論じ、子規に洋画の目をひらかせたとされています。

明治二十六年春の句会で、「牛伴」の号が初見されるなど、俳句へ傾倒していきました。

一方、子規が編集責任者を務めていた新聞「小日本」の俳句欄の挿絵について子規からの手紙での依頼に対し、画材を指定されるのを嫌い断るなど、画家としての気骨ある逸話も残っています。



子規選句稿「承露盤」 (松山市立子規記念博物館所蔵)

句会の様子



為山画河東碧梧桐賛「俳句革新記念子規庵句会写生図」

(松山市立子規記念博物館所蔵)